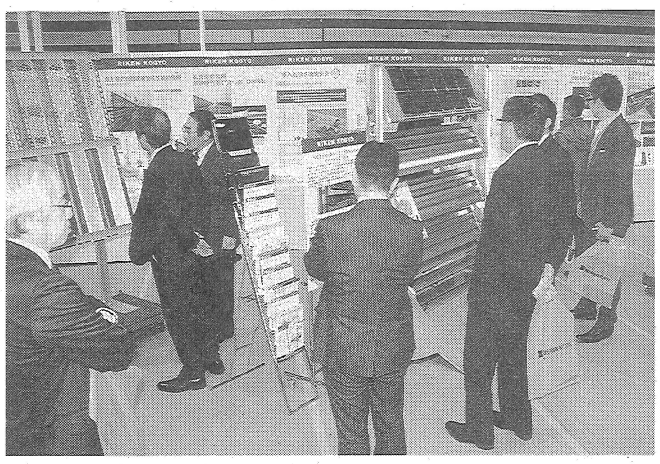
雪克服へ新技術続々

ふゆトピア・フェア・in函館



除雪や融雪ニーズに対応

2017ふゆトピア・フェアin函館が26、27日の2日間、函館市内で開かれ、雪の課題を克服する技術や製品が函館アリーナに集められた。雪に強いインフラを実現する製品や除排雪の効率を高める提案が注目された。

防雪柵の展示ブースでは、熱心に聞き入る来場者もいた

これ、函館競馬場の屋外展示・実演会には最新の環境規制に対応し、安全性や操作性に磨きをかけた除雪機械が集合した。

（関連記事4、9面に）

道内16社、道外17社が出展。ワイズ（本社・長野）やナカノアイシステム（同・新潟）は、GPSを使って除雪車両の位置や経路をリアルタイムで把握するシステムを提案した。

「ネットワークとセンサー技術の進歩で価格的にこなれ、導入自治体が増えている」といい、車両管理の効率化手法として自治体や企業から関心を集めた。

理研興業（本社・小樽）は太陽光パネルを組み合わせた融雪機能付き防雪柵や、寒地研究所が開発し、同社が製作する新形状の防雪柵などを発信した。

商談を終えた柴尾幸弘副社長は「気象変化で局地的な大雪の頻度が増え融雪ニーズが高まっていると感じた。こうした分野に目を向けものづくりを進めたい。情報交換を通じ、新技術同士の連携が図れるのも展示会のメリット」と話していた。

屋外の展示・実演会にはメーカー11社が参加。排出ガス規制の2014年基準に対応した除雪車両が顔をそろえた。

コマツは、環境対応に合わせ3年ぶりの発売となるグレーダーの新型「GD675―6」を実演。キャビンからの視認性の良さや、経験の少ない人にも操作がしやすい豊富なガイダンス機能などをPRした。

日本除雪機製作所（本社・札幌）はロータリー除雪車、凍結防止剤散布車を展示。岡本光弘営業総括・営業企画部長は「視認性や安全性が高く操作が簡単な車両が求められている。今後は自動運転技術を取り入れた車両開発を考えたい」と製品動向を展望していた。